

歴史学と人間科学

浦野 聡

歴史学^①とは、人類が残した何らかの過去の痕跡に注目し、その意義を証明することで、現代人自身や現代人を取り巻く諸事象の立ち位置（の変化）を正しく見極めようとする学問である。その先に、未来への見取り図を得られれば、なおよい。「有意性」と「正しさ」については、筆者自身は、あくまで科学的な基準で測られるべきだと思う。すなわち、探求して得た過去の歴史像が人間科学や社会科学の達成によって得られている学術的知見と論理的に整合すること（Ⅱ正しさ）と、逆に、可能な限り信頼性の高いデータを使用・提供し、歴史学自体と人間諸科学・社会科学の進展に寄与すること（Ⅱ有意性）のふたつである。以下では、近年急速に豊かな成果を生みつつある人間諸科学と、長い伝統は持つが折りに触れ学問としてのアイデンティティに疑いを投げかけられている歴史学^②が関係を深めることで、将来に何をもたらしうるかについて、近年の実例にふれながら、私見を述べてみたい。

*

参照軸にしたいと述べた「人間諸科学」とはどんな学問だろう。わが国では、それは、教育学、心

歴史学と人間科学（浦野）

理学、看護学、スポーツ科学など、人間の心身を扱う実学寄りの分野の総称であるようだが、英語の Human Sciences は、生命科学のうちの基礎科学寄りの関心から発祥した、自然科学、人文科学、社会科学の学際研究領域として位置づけられている。一九六九年にこの名のコースを、学生のために初めて提供したオックスフォード大学は、それを、「人間生命の、生物学的、社会的、文化的側面を扱うことを可能にする多様な専攻分野」と定義し、扱う中心的トピックとして、「人類とその行動の発達、分子遺伝学、集団遺伝学、人口問題、老化、民族的・文化的多様性、人類の環境との相互作用（保護、疾病、栄養を含む）」を列挙する。やや遅れて一九七二年に人間科学科を作ったロンドン大学ユニヴァーシティ・コレジは、そのカリキュラムもホームページ上に公開しているが、学部でも大学院でも、遺伝学に加え、動物生理学、人体解剖学と発生学、自然人類学、統計学と情報処理などを必修科目として設定している。こうした分野の一覧から見取れるように、人間科学は、現代における文化や生活、環境にかかわる様々な問題への取り組みも課題と位置付けつつも、もっと根源的に、生物学に軸足を置きつつ人間と人類の成り立ちを究明することを最重要課題のひとつとしている学問といえるだろう。それは、他の生物とは異なる人間ならではの脳の働きや身体的機能の獲得過程を跡付け、生物の進化史全体の中に人間という存在を定位しようとするのみならず、人間がいついかにして人間ならではの文化や行動様式を獲得し、発展させたかについてもなおいに関心を持っている。人間は、自然選択の結果としてだけでなく、文化選択の結果としても人間となったからである。そうであればこそ、この学問には、歴史学や考古学、そしてまた人類の古い生活形態やゲノム多様性を保存している狩猟採集民を扱う限りでの文化人類学といった分野と、目標上の親和性と方法上の相補性があり、私が人間科学という場合、こうした

Human Sciences を念頭に置いている。

さて人間科学の諸分野のうち、直接、人類の成り立ちに関わるトピックを扱うのは、なんともいってもこの領域の花形、遺伝学（分子遺伝学・集団遺伝学）であろう。だが、それは、あくまで生物としての人類の誕生、進化、交配、拡散、適応などの説明に寄与するものであるから、文化的・社会的存在としての人類の成り立ちや振る舞い・形成物を扱う歴史学と、自明に有意義な関係を構築しているというわけではない。前者は、遺伝子の変異箇所とその出現頻度に注目して、取得した遺伝子情報を確率的・統計的に解析することで、数百万年もの期間についての人類進化のアウトラインを数千年から数百年という単位で掴もうとしている。それに対し、後者は、とりわけ文献史学の場合、せいぜい数千年ほどの期間に残された記録を解読し、一〇年、一年、場合によれば数か月という単位で、人類の活動や思考の発展過程を説明しようとする。仮に同じ問題に取り組んだとしても、両者では、ものさしの目盛りの幅が違うだけでなく、測る対象も異なるといえる。一例を取り上げよう。中山一大氏の紹介によれば、乳幼児期を脱しても乳糖分解酵素を産み出せる遺伝子型を持つ人はヨーロッパに多いという。そうしたひとが増えたのは、生乳を栄養源とする牧畜文化の普及への適応進化によると想定できる。そうした想定の下で、この遺伝子型を持つひとの現在の地理的分布や、牧畜文化の拡大スピード等を考慮に入れたシミュレーションしてみると、ヒトがその遺伝子型を最初に獲得した時期と地域は、今からだいたい七五〇〇年前の中央ヨーロッパと推定しうるというのである¹⁾。牧畜のヨーロッパへの普及という歴史的事件に関連する重要な知見だが、しかし、その遺伝子型が、定住農耕牧畜集団と遊牧集団のどちらで発現したのかとか、その後、伝播したのは、征服と平和的通婚のいずれを通じてだったのか、あるいは、

歴史学と人間科学（浦野）

発現地域は集団的移動によって実際とは異なってしまうのではないかと等、歴史学や考古学が関心を持つ問いには、シミュレーションによる推定では答えるのが難しい。また、医学上の遺伝学の関心からすれば、そこまで明らかにする積極的な意義は少ない。適応進化が実証できれば、それで目的を達するからである。

歴史家からの問いに答えようとするれば、考古学や骨形態学、また人体組織組成分析学等の助けを借りつつ古人骨の遺伝学的比較・検討を行うことが必要である。すなわち、中央ヨーロッパで農耕牧畜が広まったとされる時期を含む前後の時代の古代人の遺伝子や骨格的特徴その他の情報を、幅広い地域から集めたサンプルの中に読み取り、それらの統計処理から系譜関係や拡散過程を可能な限り精密に再構成してみるわけである。古人骨の遺伝子解析は、良質の試料が容易に得られないので、なかなか困難が多いが、それにもかかわらず、近年、遺伝学研究は、古人骨のサンプルを科学的分析に耐えうる点数だけ集めて解析し、いくつかの重要な知見をもたらすことに成功した。すなわち、まず、少なくとも、ヨーロッパでは、最初にレヴァントを通じてやってきた狩猟採集民、次いでアナトリア経由でやってきた農耕牧畜民、さらにコーカサスから黒海北方に広がるヤムナヤ平原に起源をもつ遊牧系牧畜民という、二万年以上の期間に及ぶ人口流入の三つの大きな波が識別されるようになった。⁵⁾ これらの研究に取り組んだハーバード大学の研究チームとコペンハーゲン大学のチーム（奇しくも両者の成果は二〇一五年六月、同じ*Nature*誌上に掲載されることになった）は、とくに最後、第三の波のインパクトは深甚で、ヤムナヤのひとびとの子孫が、自らの遺伝子セットのみならず、アルプス以北の諸民族が話すことになるインド・ヨーロッパ語族の諸言語をヨーロッパにもたらした、と一致して推定している。⁶⁾ それに加え、

コペンハーゲンのチームは、古人骨の全遺伝子解析を行っており、上記の乳糖耐性遺伝子が、その発現の推定された時代よりかなり遅れて、青銅器時代（五〇〇〇年前から三〇〇〇年前）より後にヨーロッパに広まったらしいということも明らかにした。これが、第三の波自体によるものか、あるいは、その前後の人口移動によるものか、といったことの解明のためには、今後のさらなる研究を待たねばならないが、いずれにせよ、コペンハーゲンのチームは乳糖耐性が、ヤムナヤ系遊牧民の中から生まれた蓋然性が高いと推定している。⑦ しかれば、もし、拡散が第三の波の結果起こったことであるなら、それは侵入性の高い intrusive 移住活動の下で起こったという可能性が強まる。ヤムナヤ人の子孫が中北ヨーロッパに広めた、いわゆる縄目紋土器（Corded Ware）文化は、その特徴的な土器とともに、青銅製の戦斧、騎馬、荷車、銅精錬技術といった技術的先進性を示す遺物によって特徴づけられており、また、最近の研究は、この移動の波が男性中心の集団によって担われたことを示しているからである。⑧

そもそも、ハーバード大学とコペンハーゲン大学のチームの研究が行われたのは、二〇〇七年、アメリカの考古学者アンソニーが、それまでの考古学的研究成果の積み重ねを統合して打ち出した「ユーラシア・ステップ回廊」説に、直接触発され、あるいは間接に共鳴してのことであった。アンソニーの説は、考古資料の綿密な分析に基き、青銅器時代、ヤムナヤ系のひとびとが騎馬と荷車（とりわけ車輪）の発明により草原の長大なコミュニケーションルートを作り上げたことを明らかにした上で、上述の物質文化だけではなく、言語文化（インド・ヨーロッパ系言語）や政治文化（戦争技術や庇護民制度）まで運んでいたと説く気宇壮大なものである。それが、人類史に関心を持つ遺伝学の研究者たちの知的好

歴史学と人間科学（浦野）

奇心にうまくヒットし、現代の医学の発展に直接役立つかどうかとも不確かな古人骨の遺伝子分析に向かわせた、ということだろう。ユーラシア大陸の中心を東西に貫くステップ地帯の物質文化に関する考古学的知見は、メソポタミアやインダスのような、文字記録を持つ、西アジアの大河沿いの青銅器文明のその陰に隠れて注目されることもすくなかった。今や、遺伝学研究の成果を得て、青銅器時代と言う人類史の重大フェーズの歴史の意味をよりよく理解するための、最も重要な研究対象地域のひとつになったといえる。今まで靄がかかっていたステップの遊牧民とメソポタミアやインダスの都市的大河文明に接する諸民族との関係についての理解もさらに深められていくであろうし、すでにシュメール時代には、都市住民の側から鋭く意識されていた「文明」と「野蛮」、「農耕」と「遊牧」の対立と交流の問題についても、農耕文明の外側の視点から説明が進むことが期待される。これらの問題は、中国の諸王朝と北方遊牧民の関係や、ローマ帝国とフン族・ゲルマン系諸民族の関係、モンゴルの大征服等を想起すれば、ユーラシア大陸の前近代史を通じて、繰り返し、時に継起的に生起することになった、いわば歴史動態を大きく動かす動力源に関係する問題と考えられるので、それらの説明が進むことの意義は歴史研究全体にとってきわめて大きい。

*

さて、以上、ここまで書いてきたことは、もっぱら先史時代の考古学に関わることなので、いつになったら、文字資料の残る文献史時代の話題になるのかといぶかしく思われている方もいるかもしれない。実際のところ、最近では、文献史の扱う時代についても、考古学研究や人間科学研究の貢献が目され、

発掘された人骨の解析もずいぶん進められてきているから、上で挙げた事例に類するような諸学協力の事例を挙げることは、さほど難しくない。例えば、ローマ近郊の、帝政時代の墓地から発掘された人骨について、その組成成分分析を行うことで、ローマに、北方辺境の外や、イタリアのアペニン山脈などから、特に成人男性や少年男子が流入してきていたことが分かっており、そうした事実¹⁰⁾は、古代人が書き残した資料からは決して知ることができない種類の貴重な情報と言える。また、筆者自身も、トルコにある古代末期から中世ビザンツ時代の教会で、墓地から中世の人骨が多数発掘されたのに立ち会っており、これらは、その人骨の炭素同位体年代測定をするだけで、都市と埋葬地に関する関係変化の様相を解明する手がかりになりうる（ただし、実際には、資金不足で、測定は行えていない）。そうした実例を列挙することも新しい歴史学の在り方の一面を示すことになるから、それなりの意味はあるが、しかし、時代が下れば下るほど、遺伝学や考古学が与えてくれる情報は、文字資料に残された情報の洪水に覆い隠され、それらの研究が文献史研究に与えるインパクトもその分だけ小さくなってしまいうこともまた事実である（直接的には、むしろ、人間科学より、政治学、経済学、社会学、心理学といった社会科学が与える影響の方がずっと大きい）。そこで、以下では虫の目から鳥の目に視点を換え、冒頭に述べた歴史学の有意性という観点から、考古学者と歴史学者、そして遺伝子学者ほかの人間科学者が協力して人類史に取り組むことで、人類史の総体にとどのような新しい現代的意義を見出しうるか、私見を示してみることしたい。

人類史の一番のメリットは、人類の動態を二〇万年、あるいはそれ以上という、きわめて長期にわた

歴史学と人間科学（浦野）

るスペインでとらえられることだろう。野生的生活からより離れ、社会的・文化的存在であることを一層強く自覚することになって以降の歴史に限っても、一万年という長いスペインを取れる。そうしたメリツトを念頭に置けば、人口規模とその変遷は、人類の社会的・文化的活動発展のマグニチュードを測るための重要な指標のひとつになりうると思う。もちろん、伝染病や自然災害等、短期的に人口変動に影響を与える外的要因は数多く、例えば一四世紀の黒死病は、ヨーロッパの人口の半分を失わせたといわれる。その一方で、人口の減少は、社会内の緊張を軽減し、また労働力の不足を補うべき新たな技術的・文化的革新を生むとも考えられているから、^①ただちに短期的な人口の増減が、人類の社会的・文化的な発展を敏感に反映する尺度になるというわけではない。しかしながら、マクロな視点で人口変遷のトレンドを捉えた場合、人類は、その長い歴史の中で、一貫して人口を増やすのに成功してきたのである。すなわち、内外の原因によって人口の短期的増減はありつつも、人類は、社会的・文化的に自ら変化し、また環境を変えることで、この地球の「(人間)人口収容力」を拡張し続けてきた。つまり、世界人口(収容力)の成長のトレンドは、人類の文化的・社会的発展のその大まかな反映と考えられる、と見るわけである。

今日の人口(史)学の成果に従えば、この人口増大の推移には、三つの大きな画期が想定される。第一に、五万年前の「出アフリカ」、第二に、一万年前から八〇〇〇年前の「農耕牧畜革命」、第三に、二〇〇〇年前の「産業革命」である。人口学者の推計によれば、出アフリカの結果、人口は四万年間に五〇万人から五〇〇万人へと一〇倍に増え、産業革命の結果(あるいは、まだ途中経過かもしれない)、二〇〇〇

三〇〇年間に七億人から七〇億人へと、同じく一〇倍に増えた¹²⁾。人口増加に伴う環境変化の性質や速度は、前者と後者では全く異なるが、それまでアフリカの自然環境しか知らなかった人類が、中央アジアやシベリア、あるいはアメリカ大陸の山脈地域といった未知の環境に文化的・社会的に適應して人口を増やしていく際に受けたインパクトは、産業革命後に人々が受けたそれと同程度の振れ幅を示すほど大きなものがあつた、と考えれば、そのマグニチュードをイメージしやすいかもしれない¹³⁾。それに対して、第二の画期、「農耕牧畜革命」とそれに伴う人口増加が人類に与えたインパクトはどれほどのものであつただろうか。この点は、古代史研究者としての私にとってとくに強く関心をひかれる点である。農耕牧畜革命については、終点をどこに置くか難しいが、その直前の狩猟採集時代に五〇〇万人であつた人口は、都市文明がはじまる五五〇〇年前までに一〇〇〇万人と二倍まで緩やかに増えたのち、紀元前後に世界中で大農業帝国が現れた頃までには、増加の速度を速め、二億人を超えた。六〇〇〇年間、四〇倍、三五〇〇年間でも二〇倍となつたわけである。すなわち、そのマグニチュードは、出アフリカや産業革命の二〜四倍にも達したことになるが、それほどのインパクトは、超長期の文化・社会の発展史の観点からは、どのように評価できるだろう。

農耕牧畜誕生後の六〇〇〇年を、人間科学の助けを借りながら、もう少し立ち入って見てみよう。最近発表されたエストニアのグループの遺伝学の研究は、男系にしか遺伝しないY染色体と、女系を通じてしか遺伝しないミトコンドリアDNAに注目して、古人骨と現代人の遺伝子型を調査し、確率的統計処理を通じて人類の生殖人口の男女別推移を明らかにした¹⁴⁾。この研究が明らかにした最も重要な点は、

歴史学と人間科学（浦野）

世界各地で農耕牧畜が定着してしばらくすると男性生殖人口は急速に減少し（Ⅱ後世に子孫を残せない男性人口が急増した）、そののち、地域によってまちまちなタイミングながら、トレンドとして全般的に旧に復した（むしろ増加した）、ということを示した点である（これを男性生殖人口の「ボトルネック」と呼ぶ。近東では、七〇〇〇年前前後に三〇％、ヨーロッパでは五五〇〇—五〇〇〇年前に一〇％以下、東アジア・東南アジアでは七〇〇〇—五五〇〇年前に四〇％、南アジアでは、八〇〇〇—四〇〇〇年前に三〇％近くにまで減少したと計算されている）。生物学的に見れば、オスにのみ生じた生殖機会の危機、ということになるが、その衝撃の大きさは、モンゴルの大征服が進行した時代の中央アジアにおける男性生殖人口減少率の高さに匹敵するという。その原因を、気候変動であるとか感染症の流行であるとか、外因に求めえないのは、この現象が、世界の各地域で出現タイミングに差のある農耕牧畜定着に、いずれもやや遅れるタイミングで生じている、ということから明らかである。原因については、様々な可能性があり得、今のところ軽々しく断定しえない。例えば、最初に農耕牧畜文化を産み出した近東のみに限っても、八〇〇〇年から六〇〇〇年前の時期は、メガ集落がみられなくなって、最初の都市が誕生するまでの中間期に当たり、情報が少ないことも謎を深めている。しかし少なくとも、エストニアの研究者たちがその考察の中で述べているように、農耕牧畜という人類にとって全く新しい生業の採用にかかわる文化的・社会的な性格の（危機）現象であったということだけは確からしい。世界全体でみると、五五〇〇—五〇〇〇年前あたり、「国家」の時代が始まる頃には、主要な規模の人口を擁する地域では、このボトルネックは終了し、上述のごとく、そこから「大帝国」の時代までに、人類の人口増加速度は

上がり、結局、人口は二〇倍の水準にまで達する。すなわち、男性生殖人口急落という農耕牧畜の採用がもたらした人類史にとって未曾有の事態を乗り越えた後、人類は、農耕牧畜化のインパクトを、いわば手なずけて（Ⅱ「農耕牧畜の馴致」、産業革命以降現在までに工業化がもたらしたインパクトの倍ものマグニチュードの、文化的・社会的発展を達成したということになるであろう）。

それでは、この、五五〇〇年前から二〇〇〇年前までの間に起こった社会的・文化的な発展とは具体的に何だろう。まず想起されるのは、「国家」という統治・行政・軍事システムの出現と、それに支えられた大規模で定期的な「流通」ネットワークの形成である。国家と流通の成立は、奴隷の出現や戦争の多発など、人類の歴史に負の遺産をもたらした面は確かにあったが、そうした負の側面にもかかわらず、長期的には、空前のマグニチュードでの人口増加を可能にした、と考えられるべきだろう。この統治・経済システムの基本的な枠組みは、その後の人類の歴史を長いこと規定し続け、いくつかの制度は、今日にさえないお命脈をつないで、小さからぬ役割を果たし続けている（文字・記号記録、都市、法、官僚制、租税制度、市場、貨幣、為替、船舶や貨車による輸送等）。また、文化面では、特にこの期間のうち、最後の数百年の期間（人によって幅があるが、紀元前八〇〇年から前二〇〇年あたりまでの六〇〇年間とするのが一般的）のうちに起こった哲学（ギリシア哲学、ウパニシャッド哲学、儒教等）や宗教（ゾロアスター教、ユダヤ教、仏教、ジャイナ教等。社会の統合に役立つ宗教という意味で、近年では、「親社会宗教 Prosocial religions」と名付ける向きもある）、またそれに先行する文字文化、科学や数学が挙げられよう。宗教と哲学は、昨今の人類史研究の議論のコンテキストでは、社会の緊張緩

歴史学と人間科学（浦野）

和や平準化に寄与した人類の思想上・理念上の重要な発展と位置付けられている⁶。いわゆる四大文明時代の社会的緊張の度合いや身分格差の大きさについては、いまだに不明の点が多いので、そうした評価を下すのはやや性急としても、それらが、その後の人類の価値観や思考法を規定することになった文化的達成であったことは間違いなく、現代にも小さくない影響を及ぼしていることは、統治や経済に関わるシステムの場合と同様である。目下の行論のコンテキストでは、私自身は、細かく時代を区切ることはさして大きな意義を感じないので、こうした人類の「思考や精神活動の深化」ということも、この三五〇〇年間の、「農耕牧畜馴化」時代に起こった文化現象と見なしておきたい。

現在の人口増加が一体どこで止まるのか、現代人は、環境改変を行いつつどこまで地球の人口収容力を拡張するのか、予測することは容易ではない。いわゆる先進国では、文化的・社会的発展をふまえて、人口収容力は落ちつつあるようだから、同様のことが地球規模で起こり、七億人の二〇倍の一四〇億人までは増えないかもしれないし、あるいは、いわゆる途上国の人口増加や技術革新を見込めば、それ以上になるかもしれない。いずれにせよ、紀元前四〇〇〇年紀から一〇〇〇年紀に生じた人口収容力の大幅な拡張とそれを可能にした社会的・文化的インパクトのマグニチュードと比べ、その半分の程度にしか達していないこの数百年間の工業化、産業化のインパクトは、実は、人類史の中では、まだそれほど大きなものでもないという可能性がある。なにしろ、私たちは、なお、遠く古代の人類が達成した社会的・文化的制度や成果の遺産に頼って生きているのだから。そして、もし、本当にそうであったならば、私たち歴史家が、はるか遠く古代に属する歴史事象に関心を持ち、それを考究することも、そうしたマグ

ニチュードの大きさに応じて、しかるべき現代的意義を有するというるだろう。もちろん、人類が農耕牧畜という生業を創案し、それを馴致していく過程では、人類は、様々な試行錯誤を重ねてきており、大きな失敗もしていれば、大成功を収めつつもなんらかの理由でその成果を放棄してきてもいるに違いない。そうした経験を掘り起こして考究の対象にすることも、現代の社会や文化環境に身を置きながら色々な思考実験を繰り返し、よりよい未来を考えていくために、必要なことであろうと思う。¹⁷

*

人間科学と相携えて歩みを進める歴史学の現在は、古代史研究者のひとりの目には、以上のように映っている。そうした歴史学には、現代世界に生きつつ、現代世界から得られる情報のみに基づき、現代世界の諸事象の意味を考える、といういささか窮屈な課題を背負っている社会科学の諸分野とは、一味違った貢献をなすことも可能になるのではあるまいか。論じ足りない点も少なくないが、巻頭言としては、長大になりすぎているとお叱りを受けてしまうので、いったん、ここで筆をおくこととする。

註

(1) 歴史学 History は、考古学 Archaeology と対比の上、前者は、文字資料、後者は、物質資料を扱うものという区別が伝統的に意識されてきたが、特に考古学の側からは、同じ人類史を扱う二つの分野として、前者を、あえて文献史学・(文字) 記録史学 Documented History と呼ぶようになってきている。以下の用語法は、原則的にそれに従うが、文献史学を意味する場合には、それと明示する。

(2) 例えば、近年でも、スモール・ワールドネットワーク理論確立の立役者のひとり、ダンカン・ワッツ（『偶然的科学』ハヤカワ文庫、二〇一四年、一六七―一七〇頁）は、歴史は再現不能性Ⅱ検証実験不能性によって科学ではなく、あくまで物語と強調する。彼は、事件史を念頭に置いているが、社会史の立場からすれば、社会科学者たちが、インターネットを通じて採取したアンケートに基づくデータセットそれ自体は、歴史研究者が用いる資料とその本質に違いはない。重要なのは、ある理論の仮説を着想した時に、それが、複数の資料に照らした検証（すなわち実験）に耐えうるか否か、という一点であって、今現在採取したデータセットのみならず、過去に採取されていたデータに照らしてもそれが妥当であると証明されれば、それは科学的な検証手続きを経た立派な理論と呼べるだろう。その点は、彼もわかっているようで、同じく再現不能な天文学について、そのような手続きが採られることにより、それを科学と認めている。

(3) 人間科学、また考古学では、「文化」という言葉を最大限拡張して用い、生業形態から社会組織、政治システム等、人間の脳の働きによつて生み出した活動の痕跡をすべて「文化」の名で呼ぶ。私は、以下では、そういう「文化(的)」の用法に慣れない方のために、「文化」を思弁的・精神的達成の痕跡の意味に狭く用い、フィジカルで実用的な達成・活動の痕跡については、「社会(的)」と呼んでおくこととする。

(4) 中山一大「農耕牧畜に關連するゲノム多様性―現代人の疾病感受性との關連で」(ゲノム研究は人類史を変える―西ユーラシアの農耕牧畜、移動、定住研究の現在)『西洋史研究』新輯46号、二〇一七年、一五一―一五四頁。なお、乳糖耐性は、アラブとアフリカでも見られるが、それぞれで、ヨーロッパのひとびとの間におけるのと、異なる遺伝子部位の変異によつてもたらされていることが明らかになっている。ユージン・E・ハリス(水谷淳訳)『ゲノム革命―ヒト起源の真実』早川書房、二〇一六年、二二九―二三四頁。

(5) Lazaridis, I. et al., "Ancient human genomes suggest three ancestral populations for present day Europeans,"

- Nature* 513(7518), 18 September 2014, p.409–413; Haak, W. et al., “Massive migration from the steppe was a source for Indo-European languages in Europe,” *Nature* 522 (7555), 11 June 2015, p.207–211; Allentoft, M.E. et al., “Population genomics of Bronze Age Eurasia,” *Nature* 522 (7555), 11 June 2015, p.167–172.
- (6) ただし、インド・ヨーロッパ系言語の起源については、なお、謎が多い。言語は、血縁関係にない他者からでも習得しうるものである一方、ヤムナヤ系文化の担い手の遺伝子型が少数派である南ヨーロッパでも、その諸言語はインド・ヨーロッパ語だからである。 Cf. Heggarty, P., “Ancient DNA and the Indo-European Question, Diversity Linguistics Comment. Language structures throughout the world,” posted on 11 June, 2015, <https://dlc.hypotheses.org/807>
- (7) Allentoft et al., p.171.
- (8) Goldberg, A., T. Günther, N. Rosenberg and M. Jakobsson, “Ancient X chromosomes reveal contrasting sex bias in Neolithic and Bronze Age Eurasian migrations,” *PNAS*, 2017; published ahead of print February 21, 2017.
- (9) Anthony, D. W., *The Horse, the Wheel and Language: How Bronze-Age Riders from the Eurasian Steppes Shaped the Modern World*, Princeton, 2007.
- (10) Killgrove, K., and Janet Montgomery, “All roads lead to Rome: Exploring human migration to the eternal City through Biochemistry of skeletons from two Imperial-Era cemeteries (1st-3rd c AD),” *Plos One*, Feb 10, 2016.
- (11) P・ターチン (水原文訳) 『国家興亡の方程式―歴史に対する数学的アプローチ』デイスカヴァー21、二〇一五年。
- (12) 大塚柳太郎 『ヒトはこうして増えてきた―20万年の人口変遷史』新潮選書、二〇一五年。
- (13) ただし、出アフリカ後は、環境適応のため、高緯度地帯に進出したヒトは肌色が薄くなるなど長い期間に及ぶ選択の結果、生物的進化を遂げているから、文化的・社会的変化のマグニチュードは、その分割引いて考えられるべきではあろう。とはいえ、ヒトの場合は、ヒアリがコンテナに紛れて大陸間を移動し、環境に

歴史学と人間科学（浦野）

適用するのとはわけが違う。道具を用いて狩りをし、また他の動物は決して持たない、祖先の経験を記憶し、改良するという能力を持ったからである。すなわち、ヒトにとって新たな環境への進出は、文化的で社会的なものとなる¹⁴⁾を得ないといえる。

- (14) Karmim, M. et al., "A recent bottleneck of Y chromosome diversity coincides with a global change in culture," *Genome Res.* Apr. 2015. 25(4):459-66 この研究の意義については、二〇一六年度の西洋史研究会のシンポジウムで、日本における遺伝学研究の第一人者、太田博樹氏に解説していただいたので、詳細は、太田博樹「ゲノムデータから人類史を読み解く方法―何がわかって何がわからないか」(ゲノム研究は人類史を変える―西ユーラシアの農耕牧畜、移動、定住研究の現在)『西洋史研究』新輯46号、二〇一七年、一〇五―一二〇頁に譲る。

- (15) これは、最初にヤス・パース(K・ヤス・パース「歴史の起原と目標」、重田訳『世界の大思想40』、一六頁)によって、「枢軸時代 Axial age」と名付けられた時代にあたる。

- (16) Norenzayan, A. et al., "The cultural evolution of prosocial religions," *Behavioral and Brain Sciences* 39, 2016 (published online: 2. Dec. 2014); Turchin, P. et al., "Seshat: The Global History Databank," *Chlodynamics*, 6(1), 1. 2015, Jan., p.81-86.

- (17) 他方、今日の人類が、本当に農耕牧畜革命のインパクトに匹敵する産業革命のそののさなかにあるのなら、さらに増え続けるであろう人口を維持するために、農耕牧畜社会固有の文化的・社会的呪縛から逃れる算段を真剣に考えなければならぬかもしれない。ただし、農業や牧畜の生産物に頼らぬ人口維持はおよそ考えつかぬから、分配や流通、国家や社会の仕組みに限定して、ということになるうが、ともあれ、その際も、我々の思考や精神、振る舞いを直接・間接に縛っている前近代の文化的・社会的経験と達成についての考究は欠かせなく。

(本学文学部教授)